

窓辺の猫

原田康子



窓辺の猫

原田康子

講談社



窓辺の猫^{まどべねこ}

一九八八年八月二〇日 第一刷発行
一九八八年二月一〇日 第三刷発行

著者——原田康子

© Yasuko Harada 1988, Printed in Japan



発行者——加藤勝久

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽三一二三 郵便番号二三 電話東京〇三—九四一—二二(大代表)

印刷所——信毎書籍印刷株式会社 製本所——株式会社黒岩大光堂

定価——一三〇〇円

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。

送料小社負担にてお取替えいたします。

なお、この本についてのお問い合わせは文芸局文芸図書第一出版部宛にお願いいたします。

ISBN4-06-203483-2(0) (文1)

窓辺の猫

目次

第一章 宮本町 7

第二章 牛馬専門 25

第三章 犬猫よりは…… 43

第四章 渦中の死 59

第五章 荒野と海 75

第六章 桑園駅の二匹 93

第七章 雪しんしん 109

第八章 ココ・スネル 125

第九章 赤犬白犬

141

第十章 猫日記

159

第十一章 フォルティシモ

175

第十二章 総勢七匹

193

第十三章 巢立ちと死と

209

第十四章 夫恋

223

第十五章 土くれ

239

第十六章 千の露

255

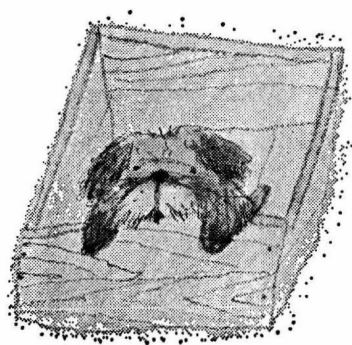
装画・カット 村上 豊

装幀 中島かほる

窓辺の猫

第二章

宮本町



北海道釧路市宮本町、いまは単に宮本とかえられてしまったけれど、かつては宮本町が正式な地名であった。私が結婚生活の第一歩を踏み出したのは、その宮本町でのことである。昭和二十六年六月、夫は二十九歳、私は二十三歳だった。

釧路の市街は、釧路川をはさんで下町と高台とに分かれている。住民が「山の上」と呼んでいた高台には、官庁や公共の施設が多かった。市役所があり、図書館と公民館があった。道庁の出生機関である釧路支庁の庁舎もあった。古色蒼然としたコンクリート造りの支庁舎の横を通りぬけると宮本町である。私たち夫婦の新居は、表通りからくんだりとなったただらだら坂の途中にあった。

新居は、二軒つづきの借家であった。私の父が、あちこち駆けずりまわって、ようやく見つけてくれた住いである。木造の平屋で、羽目板がそりかえっていそうな、かなりのボロ家だった。そのうえ、七畳半がふた部屋という妙な間取りである。一戸建ての家屋を二戸に仕切ったため

に、そういうおかしい間取りになったものらしい。押入れをはさんだ隣家が大家さんであった。大家さんは一戸といひ、ご主人は下町の産婦人科医院の事務長だった。実家と比較的近い医院で、娘時代に私も一度お世話になったことがある。看板の産婦人科に用があったわけではない。揚げ物の最中に油がはねて、手首が火ぶくれになったのである。誰が医院の受付けにいたものやら、私はおぼえていないが、一戸さんはあのとときも事務室にいたはずである。医院の小さな事務室が、一戸さんの長年の職場だった。

一戸さんの借家にはいったころ、一戸さんは父と同年輩になっていた。縁づいた娘さんがいるような話だったが、私の記憶がいかもしれない。当時は一戸さん夫婦と四人の子の六人暮らしだった。高校生と中学生の男の子がふたりに、小学生の女の子がふたりいた。のび盛りの子が四人もいては、住宅を半分に仕切って借家にしたのもやむをえなかったろう。昭和二十六年といえ、戦争に敗けて六年目の年である。世の中は多少の落ちつきを取りもどしたとはいえ、物価高で、ひとびとの暮しにはゆとりがなかった。

住宅難の時代でもあった。結婚をしても、間借りをするカップルが多かったのである。

借家に住むことができたのは、幸運であったと言わねばならない。おかしい間取りであろうと、敷居がゆがんでいようと、そこはふたりだけの空間であった。もっとも、ふたりだけであったのは、わずかなあいだである。

七月のおだやかな夕暮れだった。暑くはなく、寒くはなく、釧路名物の霧もかかってはいなかった。夕光のみなぎっていたあの日の空を、いまでも私はおぼえている。

夫は新聞記者だった。新婚のこともあり、しらふで帰る日が多かったが、それにしてもその日の帰宅は早かった。元氣な足音でそれと知れた。つづいて玄関の戸がきしむ音、たてつけの悪いガラス戸で、夫の力をもってしてもすんなりとは開かないのである。

出むかえに立った私は目をまるくした。にこにこ顔の夫が、毛のかたまりのごときものを抱きかかえている。それは、薄茶色の仔犬だった。

「かわいいだろ、こいつ」

「どうしたのよ、その犬？」

事情を察知して、私の声は早くもがっていた。

「おみやげだよ、もらったのさ」

案のじょうだった。夫は、取材先の税務署のお役人から仔犬をもらってきたのである。あるいは押しつけられたのかもしれない。生後四ヵ月の、セッター種の血がまじったオス犬だという話だった。

私は仏頂面で突っ立っていた。犬など見たくもなかった。私は、復職を考えはじめていたのである。

結婚するまで、私は婦人記者としてはたらいっていた。夫とおなじ新聞社の記者ではない。私のつとめ先は、戦後まもなく創刊された小さな地方新聞だった。入社したのは二十一歳の春先だから、記者となって三年目に結婚という転機をむかえたことになる。一人前とはいえないまでも、取材にも慣れ、仕事が楽しくてならない時期であったが、私は退職の道をえらんだ。夫婦そろっ

て新聞記者というのも、ぐあいがわるいような気がしたし、ほかにも理由があった。

新聞社にはいるまえから、私は地元の同人雑誌に創作を書きはじめていた。取材に明けくれて、創作のほうはおろそかになっていたが、突如として創作意欲が湧く折もある。ところが私の実家は、小説の執筆には適切な場とは言いがたかった。

実家は釧路川のほとりにあった。製材所の多いかいわいで、私の父もすこしまえまでは製材所のあるじだった。敗戦直後のどさくさに製材所は人手に渡り、父は名目だけの共同経営者となつて、経理を担当していた。私たち一家が、戦後も川辺の家から立退かずにすんだのは、あらたな経営者のお情けであつたのだろうか。事務所をかねた住宅で、そこに両親と、長女の私を頭に五人の弟妹が暮らしていた。一戸家以上の大家族である。個室などあろうはずはない。天井のかしんだ屋根裏の納戸が、娘時代の私の書斎だった。

退職して結婚生活にはいれば、多少はましな部屋で小説を書けそうだった。少なくとも夫が出勤したあとは、ひとりで過ごすことができるはずだった。

たしかに、私は時間と部屋を得ることができた。時間はたっぷりあつたし、部屋もひろかつた。二間つづきの七畳半だから、十五畳のひろさである。そのうえ、その部屋は静かだった。静か過ぎたといったほうがよい。

高台の大部分は住宅地である。宮本町も住宅地ではあつたけれど、町内の一劃に刑務所があつた。新居の前のだらだら坂を折れまがると、まもなく刑務所の高い塀に突きあたる。刑務所のせいかどうか、ひっそりしたかいわいだった。古びた家々のあいだを縫うだらだら坂は、通る人も

少なかった。

私は、若くて健康であつたから、家事などそれこそ朝めし前である。夫を送りだしてひと息入れると、私は所在なさをおぼえた。すると、海鳴りが耳につく。宮本町は海岸と近かつた。

実家にいたころも、夜ふけに海鳴りに気がつく折もあつたけれど、朝夕は海鳴りをかき消す活気があつた。製材所の目立場は朝から金属的な機械音をまきちらしていたし、筏を曳くポンポン蒸気や漁船の発動機のひびきも日常の物音だつた。裏手が漁師町だつたから、漁師のおかみさんたちのいせいのよいやりとりも耳につく。新聞社に出勤すると、そこにはまた別種の音が入りまじつていた。

宮本町の部屋は、私になじんでいた物音と縁がなかつた。釧路川の上をむれ飛ぶ海猫の鳴き声も、その部屋にはとどかなかつた。聞こえるものといえ、にぶい、あるいは重い海鳴りである。霧笛の音が、終日耳につく日もある。畳の上に引っくり返っていると私は、白茶けた大きなゴム風船の中に閉じこめられて、どことも知れずにただよい流されてゆくような気がしたものである。

いつてみれば、結婚して半月もたたないうちに、私は倦怠というムシに取りつかれてしまったのである。知り合つて二年後の結婚であつたから、まあ、当然のなりゆきであつたかもしれない。私は夫に向かつて、タイクツだ、タイクツだよ、と言ひ暮していた。

夫が仔犬をもらつて来たのは、むしろ私の無聊をなぐさめようとしてのことだつた。私にしてみれば、ありがたまいわくな話であつたが、夫の立場を考えると、犬を返せとも言ひかねた。新

聞記者が取材先にとんじられては、取れるニュースも取りにくくなる。税務署の部長が課長か知らないけれども、仔犬一匹で、相手の心証をそこねるのも考えものだった。

仔犬は不安なのか、夫の腕にすっかり前肢をかけていた。仔犬にしては太めの脚だった。やや大きなたれ耳で、頭部はまるみをおび、鼻もまるかった。白い毛もまじっていたが、かるくカルした薄茶色の毛におおわれていた。要するにムク犬である。セッターの血がまじっているとしても、百分の一にちがいない。私は、仔犬にふれようとしなかった。

私が、仔犬に対して冷淡であったのは、犬や猫を飼った経験がなかったからである。飼いたいと思ったことさえない。そもそも両親が犬猫を飼わなかった。年の近い子が大きいいたし、やがて戦争がはじまったので、犬猫どころではなかったのだろう。ただ、父は小鳥が好きで、ウソやヒワの鳥籠が縁側にいくつも置いてあった。私の小学生時代、川辺の家に移るまえの話である。

私は、小鳥にもさして興味をおぼえなかったが、生きものに対してまったく無関心であったのかといえ、そうでもない。裏庭で飼っていたカラスの子は、私の愉快な相手だった。羽を傷めていた幼鳥を父がひろって来て、子供の背丈よりも高い止まり木を立て、餌をあたえていたのである。人なつっこいカラスで、近寄ると大声で鳴きたてて餌をねだる。真っ黒な鳥のくせに口の中は赤かった。私は、とがった小さな舌を見るのが楽しく、餌をやるふりをしては仔ガラスをじらしていた。

傷の癒えたカラスは、いつとはなく裏庭から姿を消した。以来、生きものと接することもなく、私は夫と暮しはじめたのである。

その夜は仔犬を玄関の中に入れておいた。下駄箱もない玄関で、そのかわりに炭俵が置いてある。炭籠や十能じゅうのうもあれば、ゴム長靴も二足並んでいる。玄関というよりは、物置といったほうがよさそうな出入り口だった。

夜がふけると、仔犬はさみしくなったのか、クンクン鳴きだした。私は新婚早々、しゃにむに里子を押しつけられたような心地がした。

その日から三十数年にわたって、動物とともに暮すことになるなどとは、私は知るよしもなかった。

仔犬にはジョンという名をつけた。夫婦で相談した結果だけれど、すんなりきまったわけではない。私は飼犬の代名詞ともいべき名、すなわちボチという名を主張したのだけれど、夫はその名に抵抗を示した。ムクという名をあげると、夫はそれにも賛成しなかった。では、ゴンベエ(名無しのゴンベエの意)にしようと言うと、さすがに夫も立腹の様子だった。そこで、ようやくジョンという名に落ちついたのである。

犬小屋は父が造ってくれた。父は手先の器用なたちであつたし、職業柄、材料はタダである。名ばかりの経営者ではあつても、父にも犬小屋の材料を持ちだすほどの都合はついた。

そういえば、秋になると父は薪をとどけてくれた。真冬は石炭で暖をとつても、秋口から初冬にかけては薪を焚たくほうが煮炊きもできて便利だった。山ほど薪を積んだ荷馬車が、だらだら坂をくだって来たのはその年だけのことではない。文学少女の悪習にそまっていた長女が、どうや